Title	人々の関係を結びつける失われた鎖 : 十九世紀英国の女性社会改良家の活動を手がかりに
Author(s)	木村, 美里
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.49, 2011.1 : 175-194
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2959
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人々の関係を結びつける失われた鎖

――一九世紀英国の女性社会改良家の活動を手がかりに――

木村美里

はじめに

本論文の目的は、人々が後世へ遺すべき「環境」の保護を主題として、人間の意識改革とその精神の永続性における課題について取り組むものである。具体的には英国の女性社会改良家であり、環境保護団体ナショナル・トラストの創設者の一人であるオクタヴィア・ヒル（Octavia Hill, 1838–1912）[1]を題材に、彼女の思想にみられる先駆的考えを提示するとともに、これまでの先行研究をいくつか挙げ、ヒルへの評価と批判点を考察する。また、彼女の思想や活動に影響を与えた文献の一つであるエレン・ランヤード（Ellen Herrietta Ranyard, 1810–1879）著『失われた鎖』（*Missing Link; or Bible-Women and The Homes of The London Poor*, 1859）の検証を試みる。思想史において、研究対象であるヒルが目を通した書物について考察することは意義のあることといえよう。それゆえに、本稿ではヒルの思想的基盤と彼女の評価に言及した上でランヤードとヒルとの比較および上記著書が与えた影響を論じる。

第1章　オクタヴィア・ヒルの思想と評価

第1節　オクタヴィア・ヒルの思想――「永続する精神」――

ヒルが語った「状況が変わればさまざまな努力が必要になります。永続させるべきものは私たちの運動の精神であって、精神を失った形式ではありません」[2]という言葉は、精神的基盤の重要性とその永続性を説いている。彼女は状況の変化に対応できる柔軟性をもち、従来の手法に固執すること、あるいは前例のないことを理由に切り捨てることはせず、積極的に取り組む姿勢を貫いた。すなわち状況に応じた最善の方法を模索することで、現状改善を実現する意義を認識していたのである。その反面、自らの考えに決して妥協しない点もみられる。例えば、借家人への家賃徴収の際に滞納する者を強制退去させている点である。これは彼女が人間にとって独立心・自助の精神が重要であると信じていたゆえの行動であり、そのことを貧困層の人々にも自覚させることを目的としていたためである。したがって、彼女は一方的に借家人を排除するのではなく、家賃を支払うために働く意欲のある者の雇用・仕事の紹介を行っており、非人道的な行為を行っていたわけではない[3]。

それではヒルは永続させるべき運動の精神、すなわち「永続する精神」をどのように捉えていたのであろうか。先に挙げた彼女の言葉の続きには、「高い理想や大きな希望、そしてこの二つを実現するための忍耐力」[4]を残したいと述べられている。換言すれば、ヒルは理想と希望という思想的側面と実現のための忍耐力という実践的側面を次世代の人々に継承してほしいと願ったのである。それゆえに彼女の思想が理想実現の基盤となる背景には、二つの側面を捉えるこ

とができる。第一の側面は自然、他者への愛、道徳、美を基底とした永続性をもつ精神であり、第二の側面はその精神に基づく理想を現実化する実践力である。彼女の思想では、この二側面が共生している。したがって、ヒルの考える「永続する精神」には、実践的活動が必要不可欠な存在であり、このことは彼女の多様な活動において共通に認識することができる。一例を挙げるならば、彼女が創設に係わったナショナル・トラストは自然および歴史的建築物の保護を実行する団体であると同時に、その運営にあたり、世俗的考えに流されず、永遠に共有の財産を遺す重要性を認識している人物が望ましいとする点で人間性を重視している。[5] また彼女の住宅改良の実践活動の特徴の一つとして、精神の重要性が挙げられている。[6] このような精神と実践の重要性を主張するヒルの思考は、彼女の思想形成における影響を考察することにより理解できる。[7]

第2節　オクタヴィア・ヒルの評価

本節では、ヒルの思想または活動への評価を先行研究の中からいくつか挙げ、その概要を整理する。特に住宅改良、オープン・スペース運動そしてこの二つの分野以外のヒルへの評価に分類して考察を行なう。

はじめに、ヒルの住宅改良の評価において、主に以下のような批判的見解が挙げられている。第一の批判は、D・オーウェンの「彼女の業績のいくつかは、たしかに賞賛にあたいするが、労働者階級に対する住宅改善運動は、前衛というよりはむしろ牽制の役割を果した、といえる」[8]ということであり、第二の批判は、ターンの「彼女は課題に対する長期的展望がなく、彼女の支援は短期的活動へむけられた」[9]というものである。

井上（一九八三）の研究ではオーウェンあるいはターンのような否定的態度がみられる原因は、ヒルの行動が政府・公的機関による制度的解決ではなく、個人の奉仕的活動や家族の生活改善に重点を置いた点にあると指摘している。[10] 井

上はその結果、彼らがヒルの手法は住宅問題の根本的解決を遅らせたとの考えに至ったと言及している。[11]

中島明子（二〇〇三）の英国の住宅改良に関する研究では、近代においてヒルの住宅管理への評価が分かれる点について、公的介入への否定的態度と専制的態度にまとめている。[12] また、中島は先述のオーウェンとターンのヒル批判を受け、このような批判がありながらもヒルが評価されていることに関して、彼女が単なる住環境の改善を行なったのではなく、人間の内的側面の救済をも行なったこと、女性による住宅管理業務を社会に示したことを挙げている。[13]

井上および中島明子は以上のようにヒルへの批判を分析した上で、彼女の活動に対して肯定的な評価を行なっている。

次に、ヒルの思想とオープン・スペース運動を人文地理学の視点から捉えた中島直子（二〇〇五）の研究を挙げる。中島直子は、ヒルの先行研究を住宅史・住宅経営の研究、都市社会史・都市計画史の研究、フェミニズムの研究の三分野にわけて各分野の概観を行なっている。この研究で着目すべき点は先に挙げたオーウェンが「一八七〇～八〇年代の主だった慈善団体およびモデル住宅団体が失敗したが、唯一挙げられる団体がヒルの貧困層を対象とした住宅経営である」[14]という住宅改良においても評価している点を指摘したことである。また、都市社会史・都市計画史の研究の中で人文地理学における研究ではヒルの環境思想や活動に対する評価が軽視されてきたことに触れ、この原因をヒル自身による原因と外的条件による原因にわけて論じている。[15]

最後に上記の分野以外でヒルが低い評価を受ける原因として、軍事教練隊の結成と女性参政権への反対の問題が挙げられる。軍事教練隊は若者の教育を主体として創設されたものである。しかしながら、この軍事教練隊については軍国主義的考えの増長と戦争支持への危惧から否定的な意見も少なくなく、この否定的見解に配慮した上で彼女は教練隊のあり方について意見を述べている。[16]

女性参政権についてはヒル自身が女性の専門的職業の確立を行なったにもかかわらず、女性参政権に否定的態度を示

した点である。これは彼女が女性の家庭ないし社会改善の現場での活動に専念することの意義と地方自治体による政治運営の方がより実現性をもった影響力になることを感じていたためである。彼女が民主主義に賛同しながらもこのような態度を示した背景には、公的介入は時に国益を重視し、個人の自由や権利を侵害することを認識していたからといえよう。またこれらの問題について、ヒルの考えがヴィクトリア時代の女性観の領域内に留まったとの指摘も挙げられている。[17]

次章では本章で論じたことを前提に、ヒルの住宅改良あるいはその後のオープン・スペース運動、ナショナル・トラストの手法に影響を与えた要因として、彼女に影響を与えた著書を中心に論考を進める。

第2章　オクタヴィア・ヒルの社会改良運動への影響

――エレン・ランヤード著『失われた鎖』の考察――

第1節　ヒルと『失われた鎖』の関係

ヒルが社会改良活動をはじめるきっかけは、主に次の出来事が挙げられる。（1）彼女はヘンリー・メイヒュー（Henry Mayhew, 1812–1887）の著書などに触れ、当時の貧困に苦しむ労働者たちの現状を認識したこと、（2）祖父サウスウッド・スミスのもとで医学の報告書や法律の抜粋を写す手伝いをしており、当時の公衆衛生の事情を把握できたこと、[18]（3）キリスト教社会主義者との交流および彼らの活動に係わることを通して、実際にロンドンの下層階級における貧困の深刻さを見るという経験をしたことである。特に第三番目のきっかけは彼女の活動を発展させてゆくもので

あり、その中には彼女へ思想的影響を与えた神学者F・D・モーリス（Frederick Denison Maurice, 1805–1872）や芸術評論家ジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819–1900）などとの出会いも含まれる。神学的立場から社会の改善を試みたF・D・モーリスの思想は、ヒルのキリスト教観を根底から支えている。F・D・モーリスはヒルが信仰における疑問や社会問題についての解決を模索する際に重要な役割を果たしている。[19] また、彼は自らの見解をヒルに示すだけでなく、他の事例をも挙げることで彼女に社会問題に対する活動の知識を与えた。その一例として、F・D・モーリスが彼女へ貸したエレン・ランヤードの著作『失われた鎖』を挙げることができる。[20]

つまりF・D・モーリスによってヒルは『失われた鎖』との出会いを果たすが、本節においてヒルの『失われた鎖』に対する評価を提示することは、後述する比較考察において有効であるといえよう。彼女はこの著作について友人へ宛てた書簡の中で次のように語っている。

> 私は『失われた鎖（ミシングリンク）』という大変素晴らしい本を読んでいます。あなたも聞いたことがあるかもしれませんが、この書物は聖書を販売する女性についてのものです。彼女たちはとても貧しい女性です。そして彼女たちは聖書を販売し、最も貧しい人々を教導し、助け、励ますために、女性指導監督者たち（ladies）によって派遣されました。彼女たちが行なったことは素晴らしく、体験したものは美しいことです。彼女たちは最下層の人々の住宅へ向かい、彼らと対面し、助けました。彼女たちは何も与えませんが、定期的に支払いができる場合にはその人々のためにベッドや服を手に入れます。彼女たちは女性たちに自尊心をもって子供たちや住宅をきちんとするようにと励ます。モーリスご夫妻はその計画に深い関心を抱いており、私たちが支援できないかどうかを確認するために、私にその本を貸して下さいました。[21]

この書簡の内容から、ヒルがこの著書を高く評価していたことは明らかである。また後述で著書の内容について説明するが、記述されているバイブル・ウーマンたちの活動内容からは、ヒルが自らの活動において影響を受けたと考えられる点がみられる。この書簡ではヒルがランヤードの著書を読み、好感をもった事実は明確であるが、それ以降にヒルあるいはモーリス夫妻がランヤードの活動を実際に支援したといえる記述はみられない。また、ヒルと関係の深い慈善組織協会とランヤード・ミッションは情報提供などを行なう関係にあったが、ヒルとの直接的な係わりについては触れられていない。[22] それゆえにヒルとこの著書の関係を概観することはできたが、彼女への影響を考察する上ではこの著書と著者について考える必要があるといえよう。したがって次の節では『失われた鎖』の著者であるランヤードの生涯について詳述する。

第2節　エレン・ランヤード

ランヤードはバイブル・ウーマン（Bible-Woman）[23] ないしバイブル・ウイメン（Bible-Women）と呼ばれた女性たちが行なった聖書販売による布教活動の創始者である。ランヤードについての学術的研究は少なく、彼女の活動について記述された文献がいくつか挙げられる。[24] ランヤードは一八一〇年にナイン・エルムズで裕福な実業家である父親と優しくも規律に厳格な母親との間に生まれた。彼女は両親より聖書と小教理問答書の知識を教授され、幼少期から神の言葉に触れる生活環境の中で成長した。彼女の教派については低教会派の英国国教徒あるいはカトリック教徒との記録がみられるが、その詳細は不明である。[25] しかしながら、ランヤードは「神の言葉を伝えることと貧困層の住宅改善は全てのキリスト教徒を結びつける目的であり、そこに教派の分裂は必要ない」[26] と述べていることから、教派について寛容であったと考えられる。ランヤードは歴史、考古学、芸術および詩作に関心をもつと同時に自然への愛を常に抱き、特に

ワーズワスに深い関心をよせていた。ランヤードの伝道の歴史は、彼女が階級社会の底辺にいる人々のもとを訪れる機会を得た一六歳の時から始まる。その後多くの経験と実践的な教えを受けたことにより、彼女は聖書への関心を深めてゆく。[27] ランヤードは聖書協会で働き、聖書の配付や集金を行なった。また長い間ロンドン・シティー・ミッション（The London City Mission）の賛同者であったことから、彼女がこの団体の訪問の枠組みから受けた影響の可能性を示唆する指摘がみられる。[28] ヒルの住宅改良運動における訪問の方法はランヤードの手法からも影響を受けたと思われるが、その手法については後述する。

『失われた鎖』は当時実際に行なわれていた活動が記録されたものである。この著書にはロンドンにおける貧者の生活が描写されるとともに、そこで布教や救済活動の手段として聖書の販売活動を行なう女性たちの姿とその実績が記載されている。バイブル・ウーマンについての概要と主な活動に関しては、次の節で詳述する。

第3節　『失われた鎖』における社会改良活動

前述の通り『失われた鎖』では、当時の下層階級の生活状況を明記している。その中で描写された居住地区の状況は、メイヒューの著書『ロンドンの労働とロンドンの貧困者』で指摘されること、産業革命の影響を受けた労働者階級に関する研究とほぼ同様の内容といえる。[29]「彼らは無数の公害へのスケープゴートである」[30]との記述がみられ、下層階級の人々が産業発展の犠牲となっていたことがうかがえる。また、「貧困に苦しむ者たちは神や自然について何も語らず、路地を曲がる際に花のバスケットを一つ、偶然目にするのみである」[31]と述べている。彼らの日常には自然との対話あるいは神の言葉を聞く術もなく、人間として生きることさえ危ぶまれる状態にあった。それゆえに、下層階級に属する人々への救済が急務であるという警鐘を鳴らしている。

このようなロンドンのスラム街で救済活動を行なった者の中にバイブル・ウーマンの存在を認めることができる。彼女たちは指導監督者の下に位置づけられ、訓練を受け、報酬を得て活動するソーシャルワーカーである。指導監督者はバイブルミッションを積極的に支持する人物であり、その地域に居住する者あるいは近隣に住む者が該当した。バイブル・ウーマンの使命は二つあり、一つは下層階級の人々へ聖書を提供することであり、いま一つは彼らの現状を改善することである。ランヤードはバイブル・ウーマンに相応しい人物像について敬虔・謙虚・従順のもと勇気と常識をもちあわせ、優れた観察力と必要とされた際に対応できることを挙げている。[32] バイブル・ウーマンは貧困層の人々の住宅を訪問して聖書を販売し、聖書を共に朗読することで伝道に努め、下層階級の人々が人間らしい生活を送れるよう支援した。ランヤードがはじめて雇用したバイブル・ウーマンは一八五七年にその活動を開始し、一八五九年までには三七名のバイブル・ウーマンがロンドンで活動を行なった。この著書ではスラム街で生活する信仰を見失った人々が神の存在を認識するに至る変化の過程が記述されている。

具体的に指示されているバイブル・ウーマンの主な仕事や規定は、以下の通りである。[33] バイブル・ウーマンは担当する地域ないしその近郊に居住して活動を行なう。そして彼女たちの最初の主要な仕事は、対象となる人物が聖書を持たず、かつ、安価で喜んで聖書を購入する人物かを確認することであり、支給された鞄に聖書を入れて各家屋を訪問する。またその訪問先の購入者が希望する支払方法（全額支払いあるいは分割払い）に対応できるようにする。生活改善の側面では指導監督者より、衣類やベッドの手配の進め方について指示を受け、順をおって裁縫、料理、清掃の指導を行なう。バイブル・ウーマンは毎週報告書を指導監督者へ提出する。指導監督者は彼女たちからの報告書を受け取り、給料や家賃を支払い、必要に応じて指示を与えた。バイブル・ウーマンの労働時間は土曜日を除く毎日五時間であり、その仕事の報酬は日給二シリングであった。またイブニングサービスの際に発生する時間外勤務の報酬ついては、週二シリング六ペンスが支払われた。

ランヤードが創設したバイブル・ウーマンによる伝道方法はその後海外でも用いられることとなる。[34]

第3章　オクタヴィア・ヒルとランヤードの比較研究

本章ではこれまでの考察結果をもとにヒルとランヤードの活動を比較し、共通点と相違点を挙げるとともに、ヒルへ与えた影響を分析する。

第一の類似点は、「訪問」の手法である。[35] バイブル・ウーマンは信仰のもと聖書の販売と内容の説明を行なうために、貧困層の家庭を訪問した。すなわち、下層階級の人々の住宅を一軒ずつ訪問する過程は、ヒルが住宅改良において家賃の集金の際に借家人の部屋を訪問する手法と同様といえる。また、ヒルが借家人との関係について密接な人間関係を重視したのと同様に、この著書での女性たちもそうした人間関係の構築を重要と考えていた。

第二の類似点は両者が貧困層の人々へ行なった活動内容である。著書の中で聖書を広める活動を行なうバイブル・ウーマンは茶会を開いて貧しい家庭の女性を招待し、彼女たちの家族や生活、聖書について語り合った。[36] また、「貧しい人々が窮屈な部屋から開放され、快く家賃を自己負担する機会がもてる静かな家屋の必要性を信じ、この願いに賛同する人々により家屋の修繕が実現された。しかし、この試みは家屋を取得するよりもむしろ入居者を集めることで困難さを伴った。その理由はこの事業が家賃の自己負担を意図しているという点で人々の理解を得がたかったことである。例えば、極貧の生活を送る少女たちはこのような場所を必要とは考えず、その日を暮らせ、居住できる場を欲したのである」[37]と貧困層の住環境に対する意識の課題点が挙げられている。それゆえに、当時のこの試みは未だ実験段階であると記述されている。[38]

この共通点についてはヒルも遠足（エクスカーション）や音楽会などのレクリエーションを通して貧困に苦しむ労働者たちとの交流をはかり、彼らの精神的あるいは身体的な救済を試みた事実が挙げられる。[39] ヒルのこのような活動も人間関係において相互理解を深める有効な手段であったと考えられる。ヒルの活動の中において見られた、貧しい人々が自己の生活や利益に直接関係することを優先にし、一見すると関係のないものと誤解されやすい自然、清潔な住宅あるいは娯楽の空間の必要性へ理解が向けられなかった点は、ランヤードの経験と共通する事実である。ヒルはこの問題点への対策を考慮した上で人々の理解が得られるよう呼びかけている。[40]

第三の類似点は貧困層の生活に対する指導または対応方法における見解である。著作中のバイブル・ウーマンは先に述べた茶会で、自らが清潔で、節度のある生活態度で臨むことにより、夫や子供も良識的な人物となり、彼らとのよい関係も築くことができるのだと貧困を抱える女性たちを諭している。[41] また、食生活を改善することにより、外的な健康面だけでなく内的な心の側面を変えることができると説き、人間らしい生活のあり方について教授している。[42]

ヒルが住宅改良において重要と考え、借家人たちへ要求したことも借家を清潔に保つということであった。自助の精神と独立心を育成するために、彼女自身が住宅の修理に積極的に係わっている。[43] 両者がこのように助言や規則を定めた背景には、周辺の環境や身だしなみが人間の精神的側面に影響を与えると認識していたことにあると考えられる。

第四に、両者の考えが類似すると考えられることは、自然の捉え方あるいは下層階級の人々にとっての自然の重要性についての捉え方である。『失われた鎖』の中では大都市において困窮する人々が光、空気、水を求めていたことが明記されおり、貧者が欲したものはこのような神からの無償の贈り物であったと記載されている。[44] また田舎のような地域ではこの神の贈り物が望めたが、大都会においては容易に得られるものではないという現状も指摘されている。[45] ヒルの考える自然を包括した空間が「癒しの贈り物」[46]であるという表現はこの書物の言葉にも通ずるものがあると考えられる。ヒルがオープン・スペースに注目する頃には都市では公園のような小規模な空間が失われるとともに、田園都市に

おいても継続して行なわれてきた囲い込みや鉄道建設をはじめとする開発によって環境破壊が進行しており、人々を癒す空間が危機的状況に置かれていた。したがって、ヒルの場合においては貧しい人々の意識を変革することをはじめ、全ての人々が共通にこうした空間が重要であるという意識をもつように改革することが必要とされた。

第五に共通する点として挙げられることは、両者の活動に対する集中力および情熱である。聖書販売を通して布教し、貧困層の救済を試みたバイブル・ウーマンと、住宅改良やオープン・スペース運動により社会および人々の意識改革を行なったヒルは、自らの精神と身体を限界を超えてまで酷使して社会階層の中で弱い立場に置かれた人々のために尽力した。彼女たちの私利私欲をもたず、誠心誠意の愛情ある地道な活動は、他者の感情を動かす要因と考えられ、事実、非常に重要なことであった。

これに対し主な相違点としては、以下の事実が挙げられる。

第一に、両者では人々の救済の手法が異なる点である。ランヤードは聖書を販売することで貧困層へ神の言葉を伝える伝道と彼らの生活態度の改善を試みている。これに対してヒルは信仰に篤く神の存在は彼女の運動の精神を支えるものではあったが、住宅改良運動において住環境の改善によって人間の内面性に係わりながらも、聖書の販売というバイブル・ウーマンが行なった伝道活動の手法を採用していない。

第二に両者の活動の方向性である。ヒルは住宅改良運動を通してオープン・スペースの重要性を認識し、住宅改良運動を継続するとともに、オープン・スペースの保護運動およびナショナル・トラスト創設へと活動を展開する。これに対してランヤードは、従来のバイブル・ウーマンの活動と並行して、病で苦しむ貧困層の救済のために看護婦として訓練されたバイブル・ウーマンを伝道員として加え、信仰・医療・生活改善による伝道活動を行なっている。

第三に両者のシステムの構造である。ヒルの住宅改良運動において訓練された家主ないしワーカーたちはボランティアを中心とする人々であり、借家人である下層階級の人々に対して家賃徴収の訪問を通して直接的係わりをもつ方法で

あった。

ランヤードの伝道活動では、バイブル・ウーマンの指導監督者としての立場にいた女性たちは上位の中産階級の人々の中から選出されたが、バイブル・ウーマンは主に下層階級の女性たちが報酬を得て担っていた。これはバイブル・ウーマンの存在は同じ立場の者による伝道というランヤードの考えに起因している。また彼女たちは指導監督者と貧困層との中間に位置し、この関係においてランヤードが考えるバイブル・ウーマンは上流階級と下層階級の間に失われていた鎖といえる。ただし、ランヤード自身が指導監督者だけでなく、聖書協会において聖書の配布と集金活動を行なっているため、例外もあったと推察される。

おわりに

ヒルとランヤードが実践した「訪問」による社会改良の手法は、人間として本来あるべきコミュニケーションの形を人々に再認識させ、あらためてその正当性を実証した。形式的関係から脱却し友人ないし家族的関係を構築することは、人間関係の根本的な姿を捉え、生活環境における健全性の維持に貢献する。ヒルの住宅改良の手法はランヤードにおけるバイブル・ウーマンの活動と類似しているため、独創性について疑問視する見解が挙げられる可能性がある。しかしながら、ヒルはランヤードの活動から自らが行なう社会改良運動への指針を見出し、住宅改良の活動、オープン・スペース運動あるいはナショナル・トラスト創設へと活かした点で独創性をみることができる。

先駆者が体験する批判や困難、特にその構想が新しい変革を伴う際は、想像以上の努力が必要とされる。ヒルの住宅改良の手法について「ヒルの住宅改良運動は前衛的ではなく牽制的」あるいは「長期的展望がない」という批判もある

が、アメリカやヨーロッパ諸国（スウェーデン、オランダなど）よりヒルの住宅管理について学ぶことを希望する者が訪れ、各々の国で彼女の方法が伝えられている点は興味深く、必ずしも影響力の範囲が狭いとはいえない。[47] さらにヒルの著書『ロンドンの貧困者の住宅』（*The Homes of the London Poor*, 1875）はアメリカでも出版され、後にロシア皇后となったヘッセンのアリス公女よってこの著書はドイツ語にも翻訳されている。[48] また、ヒルは住宅改良運動、オープン・スペースそしてナショナル・トラストなどの運動において精神の永続性が重要であると主張していることから、長期的展望がないという批判については再検討する必要があるように思われる。

ヴィクトリア期という時代背景とその社会状況を捉えた上でヒルの思想あるいは活動への批判的要素があったとしても、彼女の生涯において実現させた運動と「永続する精神」への評価は高いものといえよう。

注

（1）ヒルの生涯についてはBell E. Moberly, *Octavia Hill: A Biography* (London, 1942)『英国住宅物語――ナショナルトラストの創設者オクタヴィア・ヒル伝』中島明子監修・解説、平弘明・松本茂訳（日本経済評論社、二〇〇一年）、Darley Gillian, *Octavia Hill* (London, 1990) などを参照。

（2）Bell, *op. cit.*, p. 166. ベル、前掲書、二八四頁。

（3）Bell, *op. cit.*, p. 62, 68. ベル、前掲書、一〇三、一一四頁。

（4）Bell, *op. cit.*, p. 166, 167. ベル、前掲書、二八四頁。

（5）Hill Octavia (1), "National beauty as a national asset," *Nineteenth Century* (London, 1905), p. 935.

(6) 中島明子『イギリスにおける住宅管理――オクタヴィア・ヒルからサッチャーへ』(東信堂、二〇〇三年)、七六頁。
(7) 図1「オクタヴィア・ヒルが受けた思想的影響」、本書一九四頁を参照。
(8) Owen David, *English Philanthropy* (Massachusetts, 1964), p. 387
(9) Tarn J. N., *Working-class Housing in 19th-century Britain* (London, 1971), p. 25. しかし、ターンはヒルを批判しながらも彼女の運動の重要な点も指摘している。
(10) 井上洋子「オクタヴィア・ヒルの生涯(1)」『精華女子短期大学紀要』(精華女子短期大学、一九八三年)(以下井上(1)と略す)、二五頁。
(11) 井上(1)、前掲書、二五頁。
(12) 中島明子、前掲書、七六頁。
(13) 中島明子、前掲書、七六―七七頁。
(14) Owen, *op. cit.*, p. 387.
(15) 中島直子『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動――その思想と活動――』(古今書院、二〇〇五年)、一九六―二〇三頁を参照。
(16) ヒルは平和であることが前提とした上で、避けられない際に起こる自衛のための戦争を肯定している。Bell, *op. cit.*, p. 137. ベル、前掲書、二三二頁。
(17) 中島明子「解説」ベル、前掲書、三五九頁。
(18) グレアム・マーフィ『ナショナル・トラストの誕生』四元忠博訳(緑風出版、一九九二年)、七四頁。ベル、前掲書、一二頁。
(19) Maurice C. E., *Life of Octavia Hill as told in her letters* (London, 1913), p. 16.
(20) Whelan R., ed., *Octavia Hill and the social housing debate essays and letters by Octavia Hill* (London, 1998), p. 4. Darley, *op. cit.*, p. 73.
(21) バウムガルトナーへ宛てた手紙(一八五九年一二月五日)。Maurice, *op. cit.*, p. 171. この中の(ladies)は、Lady Superintendentのことである。この他、彼女の論文の一つの中に「Bible woman」の語が登場する。

(22) Prochaska F. K. (2), “Body and Soul: Bible Nurses and the Poor in Victorian London,” *Historical Research* (Oxford, 1987), foot note 16, p. 339. Platt Elspeth, *The Story of Ranyard Mission 1857–1937* (London, 1937), p. 54.

(23) 翻訳では「女性伝道者」「女性伝道師」「女伝道」などがある。本稿では定義にとらわれない方法として原語のカタカナ表記を採用する。

(24) Prochaska F. K. (1), *Women and Philanthropy in 19th Century England* (Oxford, 1980), foot note 99, p. 126.

(25) Alldridge Lizzie, *Florence Nightingale, Frances Ridley Havergal, Catherine Marsh, Mrs. Ranyard* (USA, 2009), p. 109., Prochaska (1), *op. cit.*, p. 126.

(26) Ranyard Ellen, *Missing link: or Bible-women in the Homes of the London Poor* (London, 1859), p. 256.

(27) ランヤードに実践的な教えを与えた人物にチャールズ・デーヴィス（Charles Nice Davies）が挙げられているが、この人物の詳細は不明である。Alldridge, *op. cit.*, p. 109.

(28) ロンドン・シティー・ミッションでは、雇用された男性による訪問活動が行なわれた。Prochaska (2), *op. cit.*, footnote 12, p. 338.

(29) 産業革命における貧困層の生活状態については、T・S・アシュトン『産業革命』中川敬一郎 訳（岩波書店、一九七三年）およびフリードリッヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（上）（下）一條和生、杉山忠平 訳（岩波書店、一九九〇年）などの文献を参照。

(30) Ranyard, *op. cit.*, p. 5.

(31) Ranyard, *op. cit.*, p. 3.

(32) バイブル・ウーマンの採用にあたっては、一ヶ月の研修を経て適正を判断した。

(33) Ranyard, *op. cit.*, p.257-277.

(34) バイブル・ウーマンはアジア諸国（中国、韓国、日本）へも伝えられた。中国のバイブル・ウーマンに関する研究の一つでは、バイブル・ウーマンの最初の考案者としてランヤードが挙げられ、アメリカン・バプティストの流れから中国へ導入されたことが記述されている。ランヤードのバイブル・ウーマンにみられるソーシャル・ワーカー的な要素がなく、中国ではキリスト教の伝道者として限定された形で受け入れられている。韓国における研究の一つでは、イギリスの英国聖

書公会（British and Foreign Bible Society（BFBS））に雇用されたバイブル・ウーマンについて論じられている。日本の場合は、中国と同様にアメリカからであるが、メソジスト・プロテスタント教会から導入されていることを論じた研究がある。阿形佐恵子「朝鮮半島における英国聖書公会バイブルウーマン（Bible Woman）の実態と、プロテスタント伝道活動上の特徴（1895–1940）」『朝鮮学報』204（朝鮮学会、二〇〇七年）、蒲豊彦「中国のバイブル・ウーマン」（研究ノート）『キリスト教史学』61（キリスト教史学会、二〇〇七年）、Krummel John W., "Bible Women of the Methodist Protestant Church Japan 1880–1940,"『論集』35（青山学院大学、一九九四年）。

(35) ただし、この手法は以前より英国で採用されていたものであって、ヒルないしランヤードに限って行なわれた方法ではない。

(36) Ranyard, *op. cit.*, pp. 33-35.

(37) Ranyard, *op. cit.*, pp. 190-191.

(38) *Ibid*, p. 191.

(39) 井上洋子「オクタヴィア・ヒルの生涯（3）」『精華女子短期大学紀要』一九八九年、六六頁。

(40) Hill (1), *op. cit.*, p. 936.

(41) Ranyard, *op. cit.*, p. 31.

(42) Ranyard, *op. cit.*, p. 41.

(43) Bell, *op. cit.*, p. 55. ベル、前掲書、九一頁。

(44) Ranyard, *op. cit.*, p. 3.

(45) *Ibid.*

(46) 原文は「Healing gift of space」である。Hill Octavia (2), "Space of The People," *Homes of The London Poor* (London, 1970), p. 90.

(47) Bell, *op. cit.*, p. 86. ベル、前掲書、一四六頁。

(48) ミス・ホイットへ宛てた手紙（一八九六年六月一〇日）。Maurice, *op. cit.*, p. 537-538.

参考文献

Alldridge Lizzie, *Florence Nightingale, Frances Ridley Havergal, Catherine Marsh, Mrs. Ranyard*, rpt., USA: BiblioBazaar, 2009.

Bell E. Moberly, *Octavia Hill: A Biography*. rpt., London: Constable, 1942.『英国住宅物語――ナショナルトラストの創設者オクタヴィア・ヒル伝』中島明子監修・解説、平弘明・松本茂訳（日本経済評論社、二〇〇一年）。

Darley Gillian, *Octavia Hill*, London: Constable, 1990.

Hill Octavia (1), "National beauty as a national asset," *The Nineteenth Century*, 58, 1905.

――――― (2), *Homes of London Poor*, 2nd ed., London: 1970.

Krummel John W., "Bible Women of the Methodist Protestant Church Japan 1880–1940),"『論集』35（青山学院大学、一九九四年）。

Maurice C. E., *Life of Octavia Hill as told in her letters*, London: Macmillan and Co., 1913.

Murphy Graham, *Founders of The National Trust*, New ed., Great Britain: National Trust Enterprises Ltd., 2002.『ナショナル・トラストの誕生』（緑風出版、一九九二年）。

Platt Elspeth, *The Story of Ranyard Mission 1857–1937*, London: Hodder and Stoughton Limited, 1937.

Owen David, *English Philanthropy*, Massachusetts: Belknap Press of Harvard University Press, 1964.

Prochaska K. F. (1), *Women and Philanthropy in 19th Century England*, Oxford: Clarendon Press, 1980.

――――― (2), "Body and Soul: Bible Nurses and the Poor in Victorian London," *Historical Research*, vol. 60, Oxford: 1987.

Ranyard Ellen, *Missing Link; or Bible-Women in The Homes of The London Poor*, London: James Nisbet & Co., 1859.

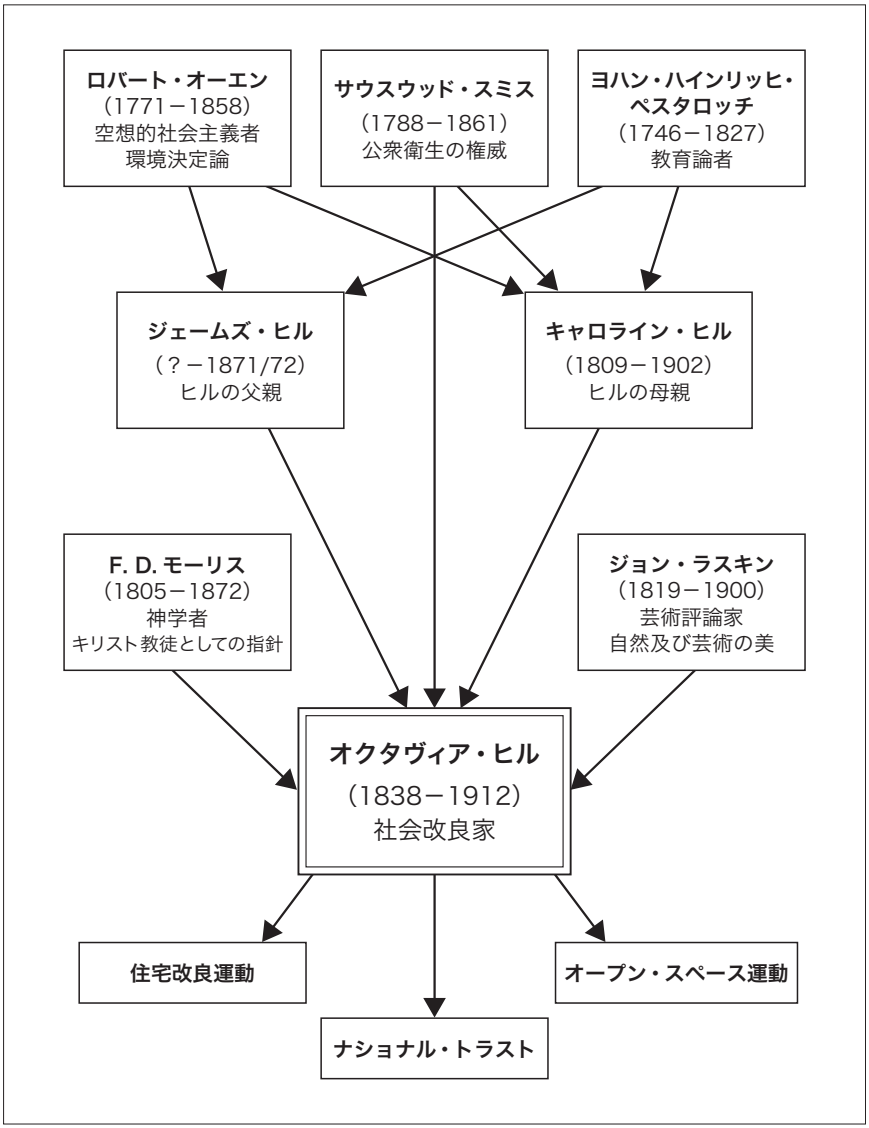
Tarn J. N., *Working-class Housing in 19th-century Britain*, London: Lund Humphries Publishers, 1971.

Whelan R. ed., *Octavia Hill and the social housing debate essays and letters by Octavia Hill*, London: IEA Health and Welfare Unit, 1998.

Wilcock Ann A., "Creating self and shaping the world," *Australian Occupational Therapy Journal*, Sep99, Vol. 46, Issue 3, 1999.

Williamson Lori., “Soul sisters: the St John and Ranyard nurses in nineteenth century London,” *International History of Nursing Journal*, Vol. 2, No. 2, 1996.
阿形佐恵子「朝鮮半島における英国聖書公会バイブルウーマン（Bible Woman）の実態と、プロテスタント伝道活動上の特徴（一八九五―一九四〇）」『朝鮮学報』204（朝鮮学会、二〇〇七年）。
井上洋子「オクタヴィア・ヒルの生涯（1）」『精華女子短期大学紀要』（精華女子短期大学、一九八三年）。
――――「オクタヴィア・ヒルの生涯（3）」『精華女子短期大学紀要』（精華女子短期大学、一九八九年）。
蒲豊彦「中国のバイブル・ウーマン」（研究ノート）『キリスト教史学』61（キリスト教史学会、二〇〇七年）。
中島明子『イギリスにおける住宅管理――オクタヴィア・ヒルからサッチャーへ』（東信堂、二〇〇三年）。
中島直子『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動――その思想と活動――』（古今書院、二〇〇五年）。

図１：オクタヴィア・ヒルが受けた思想的影響



出典：Wilcok Ann A., “Creating self and shaping the world,” *Australian Occupational Therapy Journal*, Sep. 99, Vol. 46, Issue 3, 1999, p. 81 を参照し、改編した図である。